

イスラーム・ジェンダー学科研 2020 年度『巣ごもり読書会』

イベント名：「The Good Immigrant」

日 時：2020 年 11 月 29 日（日）20:00～21:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：森田 豊子（鹿児島大学）、沼田 彩誉子（東日本国際大学）

森田：みなさん、こんにちは。巣ごもり読書会を始めたいと思います。今日のこの巣ごもり読書会は、レコーディングをしています。記録のためにレコーディングをしているのですが、皆様の方で記録と録画はご遠慮いただきたいと思います。

今日の読書会の本は、『よい移民』という本です。もともとこの本は2016年にイギリスで出版された本になります。作者などについては後で沼田さんにまた詳しくお話を伺いたいと思っており、人種、というか、イギリスの中で Coloured People という言葉が使われているのですが、日本語としては有色人と書いてありまして、有色人というのは日本語としてどうだろうということで、この点についても後で沼田さんにご指摘・問題提起をお願いしたいと思います。イギリスの中でのマイノリティと言われている人たちの経験について書いてあります。

私は鹿児島に住んでいるので、授業の中で日本に住む外国人の話とかをするのですが、外国人に会ったことがないという学生たちもいっぱいいて。アルバイト先に中国人観光客が来て、こんなに大変な目にあったっていうのをお互いに喋っているのを何度も聞いたことがあって。あまり外国人との付き合いのないまま、バイト先にやってくる中国人、中国人っていうカテゴライズして喋っているのを聞いて、残念な気持ちになる時があります。いろいろな形で、「一人ひとり」では捉えられず、何々人とか、それこそ Coloured People という形でステレオタイプ化されたりする、そういう人たちのお話が詰まっています。

まずは沼田さんからこの本の内容について少しお話いただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

沼田：ご紹介ありがとうございます。それではまず私からお話ししたいと思います。皆様、改めましてこんにちは。東日本国際大学客員講師の沼田彩誉子と申します。森田さんがお話くださったように、まず全体についてちょっとお話しして、その後具体的なエピソードについて、森田さんがいろいろ紹介してくださることになっています。

簡単な自己紹介をしたいのですが、私自身はロシア、なかでもカザンやウファなどヴォルガ・ウラル地域を出身とするテュルク系タタール移民について研究しています。特に、トルコに移住した2世や3世にインタビューを実施するため、2011年から4年間イスタンブールに留学していました。したがって、イギリス社会における移民の専門ではありません。

この本すごく面白いのですが、同時に読むのに苦労しまして。本日の読書会では、イギリス社会の背景をできるだけみながら、それにプラスして、2018年に1年間ロンドンで過ごしたことと、

2019 年からはアメリカのワシントン DC に滞在していること、そしてトルコでの日本人留学生としての経験から、私なりの読み方をお話しできたらと思っています。

原著 The Good Immigrant は、既に森田さんがお話くださったように 2016 年に出版されました。内容について、訳者の栢木清吾氏は「『移民』と『人種』をテーマとするエッセイをまとめたアンソロジーであり、作家や俳優など、21 名のエスニック・マイノリティの執筆者たちが、生い立ちや家族の歴史、日ごろ直面する不安や不満、未来への希望を語りながら、21 世紀のイギリス社会で『有色の人間※であるとはどういうことなのか』を探索している」と、述べています。70 年代以降にイギリスで生まれた移民の子どもたち、2 世・3 世の人生の物語ということですね。スライドの引用で※をつけた「有色の人間」や「BAME」という表現については、後ほどお話ししたいと思います。

本著が出版されるようになった経緯ですが、編者のニケシュ・シュクラは、1980 年ロンドン生まれのインド系イギリス人の作家です。この本は、彼がインタビューに答えた新聞記事に対する、一般人からのコメントがきっかけとなって、生まれました。その記事では、シュクラを含む 5 人の非白人の作家が執筆作業について答えていたのですが、コメント欄には「もっと有名でふさわしい人物にインタビューすべきだが、それを差し置いて選ばれたのは、たぶん全員、記事を書いたアジア系のジャーナリストの、有色人の友人だからなのだろう」という決めつけと怒りが書かれていたそうです。

訳者の栢木氏も、企画の経緯についてあとがきで触れておりまして、コメントを読んだシュクラが「現代イギリス社会で『有色人』が置かれている窮状を改めて痛感」させられたと、指摘しています。つまり、「いかに自分の能力と努力によって獲得した『席』であっても、毎度『人種』が持ち出され、その正当性」を疑われてしまうということです。それから、イギリスのメディア一般で主役となるのは常に白人であり、自分自身を投影できる人物がほとんどいないことは、非白人の若者たちが社会に排除されていると感じ、価値のない存在であると考えてしまう要因のひとつとなっている、という問題もあります。したがって、現在のイギリスで「有色人」であるとはどういうことなのかを探索した、自分たちの物語を求める読者は大勢いるはずで、社会のニーズに対してようやく生み出された一冊と言えるのではないかと考えています。

タイトルである『よい移民』について、シュクラはこのように述べていています。「この国で有色人が負わされる最大の重荷は、私たちがポピュラー・カルチャーで活躍したり、競技会で勝利したり、おいしいケーキを焼いたり、良心的な医者になったりすることで、人びとの意識の中の一線を越えて「よい移民」になるまで、社会は私たちを「わるい移民」——仕事泥棒、福祉手当にたかるやつら、ガールフrendを盗む連中、難民——とみなしてくることである、と。私たちはその重荷を負うことに、もううんざりしているのです」。

これまでの書評でもしばしば引用されている文章ですが、イギリス生まれのイギリス人である彼らが、いつまでもよい移民かどうかを判断され、人一倍努力してよい移民の認定を得ない限り社会

に受け入れられない現状が、本書の背景にあるわけです。では、よい移民となるための方法として、おいしいケーキを焼いたり、良心的な医者になったりするとはどういうことなのでしょうか。

ここで Nadiya Hussain を紹介したいのですが、彼女は 1984 年ロンドン郊外で、バングラデシュ出身の家庭に生まれました。“The Great British Bake Off”という番組はイギリスで大変人気があり、国民的ベーキング大会のような位置づけです。ナディヤはこのリアリティ・ショーで優勝し、人気を得て、現在ではタレント兼作家として活躍しています。『ナディヤのお助けクッキング』という番組は Netflix でも配信されているので、日本でも観ることができます。

スカーフを被ったムスリム女性は、それまでのシリーズの勝者とは異なって、印象的でした。私自身が「おいしいパンを焼く」という文章をみて、彼女のことだなと感じましたし、他のイギリス人の知人に聞いてみても、「多分ナディヤのことだね」と。つい数日前も、読書会に向けて何かいいものはないかと探していたら、ガーディアン紙の YouTube チャンネルで、シュクラ自身がこの『よい移民』について話す際、彼女に言及していました¹。したがって、この「おいしいパンを焼いて、マジョリティに受け入れられる」ということの、典型的な一例ではないかと思います。

「良心的な医者になる」という点に関しては、移民にフォーカスして作られた“You Clap for Me Now”「あなたたちは今、拍手をして私たちを讃えるけれど」という詩をご紹介します²。今このパンデミックという状況で、医者とかスーパーの店員とか、日常生活に欠かせない仕事をしている人びとのことを、イギリスではキーワーカーと呼びますが、そのキーワーカーにはたくさんの移民や移民の子どもたちが含まれている。彼らキーワーカーに対して、「私たちの生活を、このコロナ禍の大変な状況でも、守ってくれてありがとう」と毎週木曜日に拍手をするんですが、この拍手される対象の人たち、移民や移民の子どもたちは、パンデミック以前には様々な差別の経験をしている。したがって、「今はこうやって称えてくれるけれど、このパンデミックの諸々が終わったら、結局また私たちに対して冷たい態度を取るの？」という心情を、いろいろな移民の背景を持つ人たちが詠んでいる、そういうビデオが公開されています。「よいお医者さんとなり、よい移民になって受け入れられる」としても、それが結局は条件付きの受容であるという事例が、このパンデミック下でも見られるということですね。

さて、今回の読書会をお知らせするにあたり、以下のような案内文を出しました。

「今回は、ニケシュ・シュクラ（栢木清吾訳）『よい移民: 現代イギリスを生きる 21 人の物語』（創元社、2019 年）が題材です。イギリスに住む 21 名の「肌に色を帯びた人びと」（people of colour）による、人種の上に収斂されるはずのない彼らの人間としての「普遍的な経験」について、語りたいと思います」。

¹ Our obsession with 'good immigrants' breeds intolerance | Nikesh Shukla – In My Opinion
<https://www.youtube.com/watch?v=tVnFszCrGEw>

² You Clap for Me Now: the coronavirus poem on racism and immigration in Britain – video
<https://www.theguardian.com/global/video/2020/apr/15/you-clap-for-me-now-the-coronavirus-poem-on-racism-and-immigration-in-britain-video>

ここにある「肌に色を帯びた人びと people of colour」（以下、POC）と「普遍的な経験」という言葉が、本書を理解するうえでキーワードになるかと思います。

まずは POC について、同じ移民でも白人か非白人かを無視できない現実がある、という点をお話します。ここで紹介する”The Mash Report”は、スタンダップ・コメディアンとして活躍し、本書『よい移民』の執筆者のひとりでもあるニシュ・クマールが司会を務める BBC のショーです。サイトでは、風刺的でシュールなニュース・ショーと紹介されています。なお、クマールのエッセイについては、森田さんが後ほどご紹介くださる予定です。

この番組では、笑いを交えて社会問題を扱います。2018 年冬に公開されたのは、アイルランド出身のスタンダップ・コメディアンであるキャスリンが、プロの移民として、「イギリス人がそれほど気にしないような移民になるためのとっておきのヒント」をシェアする、というエピソードです³。

もちろんこれも風刺やダークユーモアですが、人種差別のような扱いが難しい問題をきれいごとで覆い隠すのではなく、現実を捉えて笑いどころもあるという、個人的には好きな作品です。彼女のアドバイスは、「イギリスの移民として、経済や NHS（国民保健サービス）に貢献するだけでは足りないことがある」という言葉で始まります。「あなたの存在がイギリス人にとって不快ではなくなるよう努力するのは、移民であるあなた自身だ」というのです。第一のアドバイスが、とにかく白人であること。第二が、イギリス人は 2 つ以上の言語を話す人に疑いを抱くので、英語だけを自分の言語とすること。第三が、けっして公共の場ではしらふになってはならず、アルコールを常に飲むこと。パブの文化が根付いているので、そこからのアドバイスだと思います。第四が、ムスリムにはならないこと。でもこれらは、実際には譲れない、あるいは選ぶことができない属性や文化ですよね。したがって、イギリスの移民のなかでも、とくに白人とはみなされない人びとが直面する日々の生きづらさだと思います。YouTube にもあるので、よかったら是非ご覧になってみてください。

さて、人種という概念は社会的構築物であって、線引きすることが分断を一層深めてしまうかもしれないという事実があります。しかし、いわゆる白人ではないとされる人びとを取り巻く現実があるとき、問題を認識するために彼らに特有の呼称が必要となります。『よい移民』の原著で用いられたのが、POC でした。訳書では、この言葉が初めて登場した際に「ピープル・オブ・カラー」と併記したうえで、「有色人」と翻訳し、「肌の色自体ではなく、それを理由にした差別を受けた経験を共有している点」を重視した表現と解説されています。以降は、一貫して「有色人」と表記しています。

ただ今回の案内文では「有色人」とせず、訳注にあった「肌に色を帯びた人びと」との表現を用いました。アパルトヘイトや黒人差別と結びつく「カラード」は「有色人種」と、本書で明確に訳し分けられているのですが、短い内容紹介文の中で受ける日本語の印象を考えて、どうしても躊躇しまったということがありました。個人的に「有色人」と聞くと、どきりとするのは、色を基準

³ How to be an immigrant British people like | The Mash Report - BBC
<https://www.youtube.com/watch?v=rqOlky0blVs&list=LLtvDGay-P3kaSmNrc6-8ILA&index=3445>

にして人を区別するおぞましさを感じるからかなと思います。とはいえ「肌に色を帯びた」にしても、じゃあ白人は無色透明なのか、という疑問がうまれるわけです。

栢木氏は、トークイベントのなかで「混血という言葉も日本ではまだ使われることがあるが、『よい移民』の翻訳では使っていない。日本では、移民やその子どもを話題にする時の語彙があまりない。翻訳は言葉を作っていく作業なので、その点も留意しながら訳した」と話されていたようで、苦心しながら翻訳されたんだろうなと感じています⁴。

もう一つ、BAME という表現もあります。これは Black, Asian and minority ethnic の略称で、イギリスにおいて非白人を指すときに使用される言葉です。アメリカではおそらく使われていないのではないかと思います。原著の表紙にも、"21 writers explore what it means to be Black, Asian & minority ethnic in Britain today."という宣伝文が掲載されており、ニケシュ・シュクラも BBC のインタビューのなかで Black, Asian and minority ethnic と POC を両方使っています。

呼称は、ポリティカル・コレクトネス（政治的妥当性）への意識の高まりなど社会の変化の中で誕生し、変化するものです。これら 2 つの用語は、現在では政治的に妥当である、ポリティカリー・コレクトだとみされていると、言えるでしょう。しかしこのことと、その名前で呼ばれる人びとがどう感じるかは別の問題です。ポリティカル・コレクトネスを、特定の集団を不快にさせる言動は避けるという原則だと理解するならば、当事者が嫌だと感じることは、一見矛盾しているようですが、むしろこの点にこそ意味があります。つまり、ポリティカル・コレクトネスは絶対の正義ではなく、時代や社会状況に即して常に見直されるものです。例えば、今 Black Lives Matter（以下、BLM）、黒人に対する不当な暴力や差別に抵抗する運動が起こっています。このように今日ではブラックが主流となっているわけですが、ちょっと前までは「アフリカン・アメリカン」の方がより適切だとされた時期もあったわけです。

したがって、POC や BAME も同じく、人びとにずっと認識され、使用されてきた表現ではないし、絶対の正解でもありません。いつ頃認識するかは当事者性や個人の関心によって異なりますし、その用語を使用するか、どう感じるかという点については、まさに十人十色です。

今回の読書会の準備をしている時に、マジョリティ側の白人だと自己認識する人びとはどう考えているのかと、イギリス出身で現在は南米に暮らす 30 代の女性に話を聞いてみました。彼女が言うには、イギリス社会は正しい表現を見つけるのに苦労している。どの表現でも、完全にしっくりとはこないのが、模索し続けて行き詰っている。POC は、4, 5 年前から使われるようになった印象があって、適切だとされているけれども、「カラーとは何か (What is colour?)」という疑問も抱いてしまう。BAME についても、とてもよく議論されている表現で、ポッドキャストのある番組では、当事者が「カテゴライズされて、まるで別の人たち扱いだから、この表現は嫌い」と言って

⁴ 「よい移民」和歌山トークイベントレポ
<https://note.com/hitomicubana/n/n74dad86851d9>

いたのを聞いたと話していました。彼女自身は、British with Indian heritage とか British with Irish heritage というように個別具体的に呼ぶよう、心がけているそうです。

BAME という言葉についてですが、いわゆる人種問題というとき、日本語でアクセスできるメディアではやはりアメリカがよく扱われているのかなと。このとき、BAME はイギリスに特化した表現ではないかと、今回取り上げることにしました。この BAME という用語は、BLM、イギリスでも関心を集めていますが、その広まりと Covid-19 による高い死亡リスクとの関連という二つの出来事を背景に、より目立つようになってきました。

しかし、先ほどからお話ししているように、否定している当事者もいる。BBC の記事は、彼らの意見を紹介しています⁵。「白人とそれ以外」という考えを強固にしている。マジョリティにとっての逃げ道になってしまう。BAME の中でも経験は様々なので、個別具体的に問題を把握すべきだ。あるいは、BAME の中でも差別があるんだというような、様々な意見があります。

白人との違いを明確化するという意味では、POC も BAME も同じかなと思います。そもそも人間であるにもかかわらず、肌の色や濃淡で差別をするカラリズムに基づく表現が存在しなければならぬこと自体が問題であり、それがぴたりくるわけがないのです。それでもなお、編者のシュクラがこれらの言葉を使うのは、“I don't see race”「人種なんて気にしない」という表現があるのですが、そういう態度が、無知とか無関心、現実の拒絶に過ぎず、人種差別の解決にはつながらないからではないでしょうか。「外見を無視すること自体はできないので、人種に気付くことは OK。だけどその後どう接するのかが問題なのだ」と、シュクラはあるインタビューで答えていました⁶。人種がイギリス社会の問題を解決するために重要な切り口であって、きちんと問題として認識しなければならないことと、英語であっても日本語であっても、言葉自体のもつ響きへの違和感があることは、矛盾していないと思います。

次は universal experience、普遍的な経験ということについて焦点を当てていきたいと思います。イギリス生まれのイギリス人でありながら、いつまでもよそ者扱いを受けるシュクラたち 21 人の執筆者が、普遍的な経験を語るとはどういうことか。シュクラが编者まえがきにおいて、「普遍的」という言葉をどのような意味合いで用いているのかを考えてみました。原著では universal と書かれています。つまり、人間であれば誰もが普遍的にもつはずの感情や問題といった経験、文化、言語、民族などを異にしている、誰もが共感・共有可能であるはずの経験が、白人だけのもの、白人が基準とされていることに、異議申し立てを行っているのではないか。執筆者たちは、人種のことばかりを書きたいわけでも、書いたわけでもない。だけれども、「やることなすことすべてに人種が関わって」くる「有色人」の現実があって、不平等な力関係や差別が蔓延する社会において、「有色人」であるとはどういうことかを示す本書が必要だったのです。

⁵ 'Don't call me BAME': Why some people are rejecting the term
<https://www.bbc.com/news/uk-53194376>

⁶ But where are you REALLY from? | The Good Immigrant
<https://www.youtube.com/watch?v=IUUhQNXp3Hw>

したがってシュクラは本書を、ステレオタイプ化された「いかにもな移民の経験」ではなく、自分たちの声による自分たちのストーリーを集めたものとししました。

考えてみれば、例えば怒りは誰もがもつ感情です。でもその感情の持ち主が「有色人」とみなされると、人種だけを基準にして解釈される。人種が前面に押し出されていなかったり、マジョリティの側が共感を覚えると、「有色人」も普通の経験、普遍的な経験をするんだと驚かれる。それは本来、おかしいことですよ、というようなメッセージを私は感じ取りました。

本書が焦点を当てるのは、「有色人」にとっての普遍的な経験ではなくて、誰もがもつ人間にとっての普遍的な経験。だけれども実際にはそう受け取られないことに対してうんざりした読者が、本書の中に自分を見出す可能性、そういう人たちに最も届けたいんじゃないかなと思います。

本書の執筆者たちをはじめ移民の子どもたちは、自分を理解しようとする際に、絶えず他者から判断され、人種に基づくラベルを貼られます。したがって、人種から経験を理解するのではなく、経験から他の色々な要素を含めて人種という社会的構築物がなんであるかを理解する、という試みが必要なのではないのでしょうか。これがシュクラに応える読み方のひとつではないかと、私は感じました。

この後、自分の個人的な経験とか、雑感とかを書いたのですが、これは森田さんのお話の後にフロアの皆さんともお話しする中で言及できたらと思います。ここまで本書を読む上での背景などをお話ししてきました。この後、森田さんにおすすめのエピソードをいろいろ紹介していただけたらと思います。

森田：ありがとうございます。フロアの方にもたくさんお話しをいただきたいと思いますので、あまり私は時間を取らないようにしようと思っています。

この本には21人の方の経験が書かれています。この中の21の方が、作家であるとか、俳優であるとか、イギリスの中で活躍されている方ばかりです。この中の一つ、コメディアンの人がいるのですが、インド出身です。ヒンドゥー教徒の方です。朝起きたら、ミームっていう、TikTokとかそういうSNS、YouTubeみたいなもので、インターネットを通じて写真だとかそういうものに、いろいろ飾りをつけて発表されるものなのですが、彼自身の写真がイスラム教徒であるとして紹介されている。彼の写真の下に、キリスト教徒どもが我らの預言者を侮辱したのは腹立たしいが、イエスも預言者だから侮辱はできないとして。本人は何もそういうことを書いていないのに、自分がいつの間にかイスラム教徒にされてしまったという経験が紹介されていたりします。

後、「テロリストの妻」というお話もあるのですが、イラクとイランとイギリスの出自をもつ女優さんなんですけど、その女優さんが演劇学校で勉強した後、ふさわしい役として結局テロリストの妻の役を割り当てられてしまうという。そういう、「私」ってなんなんだろうって考えるお話もあったりして。

21人の人が自分の経験を、自分がイギリスで実際に受けた経験というのを一人一人が書いていて、それを人間としての普遍的な経験として書いています。でもたくさんのステレオタイプ、

他の人たちからのステレオタイプにさらされているというか。いつもステレオタイプの中で生きている人たちの姿が、一人ひとりの経験の中に現れています。

だからこの本、理論的なものは全く書かれていなくて、とにかく個人の経験がずっと並べられていくのですが、これが全部並べられていくうちに、イギリスに住む人たちのいわゆる POC の人たちの経験が書かれています。日本と比べてみたり、他のアメリカと比べてみたりとか、いろいろな形で読めるとは思うのですが、皆さんの中でも海外で長く暮らされた経験のある方いると思います。いろいろなステレオタイプに悩まされるとか、ステレオタイプの判断をされて違和感を抱かれた方とかいっぱいいると思います。人の経験とか、人を判断する、私授業で言うときには線引きをするとよく学生に言ったりするんですが。自分と他者との違い、で他者を見るときに、他者をカテゴライズする／してしまう問題とか、その点について皆さんの経験とか、この本を読んで思われたこととか一緒に共有できたらと思っています。

というところで、何か皆さんの中で。先ほどの沼田さんのお話で、ご質問とかある方でもいいですし、そういうご自身の経験に基づくお話でもいいので、何かあればいいのですが、なかなか難しいですかね。その前にでは沼田さんにお話し、今アメリカにお住まいなので、アメリカの経験だとかそういうのを含めてお話していただいてもよろしいですか。

沼田：非常に個人的な経験なので恥ずかしいですけど。

やっぱり、短期間であっても、どこに住んだかいうことで経験はそれぞれ違う。私は私であるのですけど、それぞれの社会で、日本人がどうみられているとか、ジェンダー観がどうなっているとか、そういうもので自分自身の経験はものすごく異なってくるな、というのが、全体の感覚です。

初めて長く海外に暮らす、という経験をしたのが、イスタンブルでした。トルコに留学されていた方、今日集まってくくださった方の中にもいらっしゃるかなと思うんですが、基本的にはものすごく好意的に接してくれる。ちょっとでもトルコ語を話せば、とても喜んで褒めてくれる。基本的には肯定的な経験／視線なので、そのうち視線にも慣れていくんですね。見られるのが当たり前、みたいな。トルコには行きたくて行ったし、いい経験もして、本当に感謝しています。むしろ今回改めて、トルコで民族や人種に関わるようなことってあったかなと振り返ってみると、思い当たるのが、トルコの地方都市に行ったときに学生の皆さんから写真を撮ろうと言われて、両手を合わせたポーズをしてほしい、それで一緒に写真を撮りたい、と言われたんですね。でも、このポーズって日本で、いただきますっていうときくらいかなって思うんです。あとはお参りするときとか。だから、「私たちはこういう風には、こんにちはってやらないんだよ」と、一生懸命話したんですけど、彼女たちは日本人と日本的なことをした証拠の一枚が欲しいというよう感じで。悪気はないんだけど、それをお願いされたことを思い出しました。それから、留学生をトルコに呼ぼうというイベントにたまたま参加した際、写真をとるときに人がいっぱいいるので、「いいや私は」と思って後ろにいたら、「インターナショナルっぽくするために、アジア人顔がいた方がいいから」と言って前に押される。「私」ではなくて、「見た目」が必要だからください、「アジア人顔」をくださいとか、そういう経験でした。

ほとんど唯一と言って良いくらい、イスタンブールで民族・人種を理由にして怖いと思った経験が、2015年に中国政府のウイグル人に対する政策への反感とか関心がトルコで高まって、トルコ人のごく一部ですが、中国人を懲らしめようみたいな感覚になって、中華料理店などを襲うっていうことが何回か起こったんですね。そのとき、「中国人と言っても、一般のトルコ人にとってはアジア系の顔は区別がつかないので、中国人、日本人、韓国人、その他の人、だれでも攻撃される可能性があるので気をつけてください」というお知らせが、日本領事館から来たんです。そういう時期に地下鉄に乗ったんですが、若い男の子たちが集まっていて、こっちをみってくる視線がこれまで感じたことのない、なんかやってやろうみたいな視線を感じたんです。それは本当にそうだったのか、あるいは私がそういう感覚を持っていたから怖くなってしまったのか、わからないんですが。普通に暮らしているだけで、見た目で判断されるのがどれほど恐ろしいことかというのは、そのとき強く感じましたね。

逆にロンドンに行くと、イギリス全体の白人の割合は87%ですが、ロンドンだと45%なので、半分以上が非白人。誰も私をみてこないという、トルコにいるときとは全く違う経験が待っていて、埋没できる心地よさっていうものはそこにあったのかなと感じています。

ロンドンにいたのはたった一年で、今度はワシントンDCに来ました。ワシントンDCも様々なバックグラウンドを持つ人がいて、今回大騒ぎだった大統領選でもDCははっきり民主党が勝つというような、「人種の多様性」という点では一応、風通しの良い場所ではある。それでもこのコロナの関係で、「あ、これが差別か」というような経験もしました。アメリカ社会、イギリス社会でも、アジア系の移民というのは基本的に自立して独立して成功した移民たち、というイメージがあって。モデル・マイノリティという言葉がアメリカでは使われたりしますが、それは本書にも書かれています。モデル・マイノリティというのは結局、受け入れられているわけでも、平等にみられているわけでもなく、ただ保護観察下にあるようなものだ。そのラベルというのは、モデル・マイノリティから急に悪い移民、というふうに簡単にマジョリティ側とか政治の動きの中で変わってしまう、というエッセイです。まさに今回、大統領が「チャイナ・ウィルス、チャイナ・ウィルス」と言うので、アジア系に対する視線がものすごく変わった。

それで私の夫、日本人ですが、彼が仕事に行く途中にバスに乗っていて、バスから降りようとした瞬間に、「出て行け中国人」みたいなことを言われたんですね。それを聞いて、私はそのとき一緒にいなかったのですが、ああ夫がそういうことを言われたら、私も言われるかもしれない、自分の大事な人がそういう目に遭ったっていう、そのことがずっと頭の中にあるようになって。出身地がどこであっても、誰一人そのような言葉をかけられていいはずがありません。

そういう経験をしたすぐ後に、外出する機会があって、お店の入り口で私に気づかずにドアを閉めようとした人が、「ああ気づかなかった、ごめんね」といって笑顔を向けてくれた。たまたまバスで冷たいことを言った人と、その親切にしてくれた人が、同じPOCの一員だったんですね。だからBAMEの中でも差別があるっていうのは本当にその通りだと思いますし、その人の人種だけで差別をするかしないかを図ることもできない。人を人として見るのか、それとも「チャイナ・ウ

イルス」と言ってレッテルを貼ってしまって、全てを敵対視してしまうのか。そしてそのことがどれだけ危ないか。特に非常事態において、他者を作って攻撃するということは繰り返されているので、本当に小さな出来事かもしれないけれども、そういうことを感じることがありました。

ただ同時に、偶然見かけた記事で、日本ではまだ社会的距離、ソーシャルディスタンスというのがほとんど認識されていなかった頃、アメリカに来た日本人旅行者の話として、「エレベーターですでに誰かが乗っている状態で、自分たちも乗ったところ、すごく嫌な顔をされた。ああやっぱりアジア系は差別されるんだという経験をした」と書いてありました。アメリカではすでに、2メートルの距離を取りましょうという話が出ていて、エレベーターも他の人とは同乗しないようにしましょうということが一般に認知されていたので、もしかしたらそのことが理由で嫌な顔をされたのかもしれない。だから差別なのか、それともそのときの社会的なルールなのかを判断するのも非常に難しい。

とりとめのない話になってしまいましたが、マジョリティではないからこそ経験する、日常での唐突な衝撃があるという学び。それと、私は海外で暮らすことが好きですが、そう言っていられるのは、おそらく日本でどんなにジェンダーギャップ指数が酷くても、日本人として生まれて、日本人の両親がいて、自分の母語である日本語で学ぶ機会があったから、そして戻ることができるからこそ、そういう風に感じるのかもしれないという、自分のマジョリティとしての暴力性というのとも考えなきゃいけないんだなと感じています。

森田：ありがとうございます。

結局ジェンダーの関係も同じようなもので、男だから女だからとして、カテゴライズしてしまうところですね。女性がこういうことを言うと別の反応が返ってくるとか、男性がこういうことを言うと別の反応が返ってくる。同じように、インドの人がこう言う風に言うと、反応が変わってくるという。人種差別っていう言葉って、そういうものがあるんだってぼんやり思われがちかもしれないんですけど、そうじゃなくて細かい、目線一つから始まる、人と人との関係、ある反応に対する反応とか相互作用というもののから、全て差別とかが始まるんだっていうのがわかる。

質問者：すみません。大した質問ではないのですけれどよろしいでしょうか？

大変興味深く伺って、私も今アメリカのムスリムを研究しているので、アメリカのこととかイギリスのこととか比較して知りたいなと思っているのですけれど。

先程の BAME という言葉なんかで、肌の色のついた人としてアジア系も黒人も同じある種のカテゴリーとして白人と違う、と差別をされるという話を伺ったのですが、私のアメリカにいた経験だと、やはりアメリカの場合、黒人差別と、他のアジアアフリカから来た移民の人たちに対する認識っていうのは違うっていうのが、多くの人の了解事項にあって。いわゆる黒人の場合は、奴隷として連れてこられた人の子孫で、その時の構造がずっと今でもあって。アジア系がモデル・マイノ

リティって言われることもありますけど。私なんかも行った時はその辺がよくわかんなかったんですが。

黒人の人たちは自分たちに対する差別っていうのは違うんだという、アメリカだとそういう歴史的な文脈があるんですけど、イギリスだとどうなんですかね？そういう歴史的な過去はないわけですよ？特に黒人だけが奴隷として来たとか。そういう中で、みんなが移民として同じような感じで言われるのか。あるいは、特定の移民の人たちの経験というのは、他の移民たちと区別してみなきゃいけないと言われるのか。沼田さんは今アメリカにいらっしゃるので、多分そこら辺の違いは結構認識されてるのかなと思います。その辺、もしよろしければ、教えていただければありがたいです。

沼田：ありがとうございます。ご指摘の通り、イギリスでもやっぱり、黒人の差別の経験と、それ以外のマイノリティの差別の経験は違うという認識が、少なくとも黒人の間ではあるんじゃないかなと思います。というのは、BAME に関する否定的な当事者たちの記事を読んだ時も、黒人男性というのは攻撃的であるとか、脅威であるというステレオタイプがあるがゆえに、彼らならではの差別経験が存在する。それなのに、BAME と一緒くたにされてはいけない、アンチブラックネスと言うべきだ、とはっきり主張していました。また、イギリスでも黒人は奴隷として働かされていました。例えばブリストルに銅像があったのだけれど、BLM の動きの中でそれが撤去されたというニュースが報道されました。有名な商人で、ブリストルの発展のためには色々なお金を出して貢献したかもしれない。けれども、そのお金というのは奴隷から搾取したものであった。だからいつまでも彼が英雄として、銅像がそこにあるのはおかしいということで、BLM の動きの中で、人びとが引っ張って落っことしたんですね。落っことされた後に、早速 Google Map で銅像の居場所が湾の中に変わっていて、仕事の速さに笑ってしまったのですが。そういうこともあったので、その意味での違いというのは、イギリス社会とアメリカ社会では、共通項が多いんじゃないかなと思います。

質問者：ありがとうございました。

森田：あと、差別をされるというか、差別の構造というのは、その人たちがマイノリティであること、プラス、歴史が必ずくっついている。だから奴隷としての歴史であるなり。イギリスだとやはり、植民地支配をされていた国の人であるということ、そういう歴史というのも特別なものとしてあるんじゃないのかなっていうのも思ったりします。この人自身がインドの人だということもありますし。それもあるのかなって思っで見るところもあります。

あと、参加者から、雑感としてスライドにあるのもご説明くださいということなので、そこもお願いしていいですか？

沼田：はい。一つ目は、コンテキストとか文化とか社会的背景がわからないと、理解するのが非常に難しかったということです。最初に原著で読んでいたときに苦労して、その後翻訳が出てとても

ありがたかった。同時に、日本語だけで読んでいると、霏がかかったように感じる部分もありました。したがって、読み比べると理解がより深まるかな、というのが一つ。

それから、「私の名前は私の名前」というエピソードがあるのですが、そこでちょっとトルコ語の音の表記が、「あれこれどうかな、もしかしたらトルコ語の読みが少し違うんじゃないかな」と気づいたところもあったので、一応、ここに書かせていただきました。

もう一つは、この本にしても、色々な個人の経験に注目して、それを尊重するということは大切ですが、そこで書かれている差別や格差の問題っていうのは個人の問題ではなくて、社会とか権力構造のレベルで解決しないとイケないことだということも感じました。私たちの心の中っていうのは基本的に自由ですよ。心の中って基本的には制御できないし、その自由っていうのは担保されるべきだと思います。だけれども、それに基づいて、差別的な言動や仕組みが許される社会というのは変えなければならない。ですので、個に集中するあまり自己責任みたいな感覚になってしまうのは違う。個から社会を理解して、個に還元されてしまっている社会の問題をどう変えていくかというのが、実際の課題であるというように考えています。

このとき、解消する努力をしなければならないのは、差別をされる側、BLM 運動であれば黒人の側ではなく、差別をする側、例えば白人特権を掴んで離さないような人たちの責任です。だから、例えばオバマは黒人大統領だったけれど、「彼が十分に黒人について頑張らなかったからこうなんだ」みたいな意見を言う人もいるんですが、それは違う。されてる方がやらなきゃいけないと言うのは、おかしいことです。

そういう風になると、今度はマジョリティの立場になったら何をやっても批判されるんじゃないのかと、不安になってしまうこともあると思います。誰だって無意識の差別とか悪意のない差別をしてしまうことがある。でも、してしまったこと自体で全てが終わりなのではなくて、知ったらどうアップデートするかということを意識すれば、もっと良い変化が生まれるのではないのでしょうか。意図がどうだったかというよりも、実際にどんな影響があったかというのが問題なので、そういうところを共通認識としてもう少し共有できるといいんじゃないかなと考えました⁷。

それから、よくそういう話をする、逆差別じゃないかという反論が来るんですが、差別、人種差別というのは、偏見プラス権力の組み合わせです。誰もが偏見の被害者になり得るんだけど、それに権力的構造的な後押しがついた状態が人種差別だという定義の違いがうやむやなままだというのも、問題の解決を難しくしているんじゃないかと思います。

最後に引用した“Privilege is invisible to those who have it.”⁸というのは、特権というのはそれを持っている人には見えないもの。だから、差別はないとマジョリティの側が言うことはできないということです。したがって、自分自身を、マジョリティの立場からも、もしかしたらマイノリティかもしれないという立場からも、いろいろ見ることによって、こういう問題はもっと日常に根差し

⁷ 5 Things You Should Know About Racism | Decoded | MTV News
<https://www.youtube.com/watch?v=8eTWZ80z9EE>

⁸ 'Privilege is invisible to those who have it': engaging men in workplace equality
<https://www.theguardian.com/sustainable-business/2016/jun/08/workplace-gender-equality-invisible-privilege>

た、そして具体的に解決可能なものとして認識できるようになるんじゃないかなと、雑感として述べた次第です。

森田：この本はすごく一人一人の経験から導き出されるものなんですね。だから、一人ひとりの経験を描くうちに、大きな世界・社会の中の人種問題というのが、差別だとかが浮かび上がってくるという本。だからこういう本の書き方とか、この本が浮かび上がらせている差別のことについて、お話ししたかったかなと思ってるところです。

普遍的な経験っていうことを書かれましたが、ここに出てくる人たち、普遍的な経験を書いてるんですっていう風にして書いてるんですけど。やっぱりどうしても、マイノリティの、差別されてる人種の人たちの経験は、普遍的ではない。普遍的と言われているのは白人のものなんだ。とか、そういうことについて、お話ししたいかなって思ってるところです。

質問者：すみません、悩むところが二つありまして。

一つは沼田さんとか、森田さんの話を聞いていると、差別一般について話したくなっちゃうんですね。例えば、逆差別はないというのはそうなんですけど、やはりトランプ大統領の岩盤支持層はそうは思っていないんだろうとかね。この本から離れたことを話したくなって、そっちの方に頭が膨らんでしまう。この本に引きつけようとする、と、すごく大変なんですね。

おそらく、ニケシュ・シュクラがわざと、戦略的に、すごくバラバラな物語を集めたんだと思うんですよ。だから、これ書いてる人が、白人としてイギリスの核にいないという共通性以外、ほとんどない。書いてる内容のね。それは戦略的にそうしてるんだと思うんですけど、この辺について語れと言われたときに、どうしようってすごく悩む。

あとは、読み方？英語でもやっぱり読みにくいと思う。一つは読みにくいのは、お勉強した英語では読みにくいタイプの英語だからじゃないかなと思うんですよ。ほんとにどうでもいい個人的な経験をいうと、イーストエンダーズというイギリスのドラマが私わかんなかったんですよ、英語が。私英語はそれほど苦手じゃないはずなのに、本当に分からなくて。これを読んでも、あれを思い出してですね、どんどん辛くなっていく。わからないところにぶつかるたびに、わかんねーとか。要するに、細かいイメージがピシッと入ってこない、結構楽しめない。これイギリス人だと笑いながら読むんだと思うんですけど、笑いどころが掴めないと思って、ちょっと悲しく思いました。

ここの物語はいろいろ面白いし、私はスチュアート・ホルの“New Ethnicities”という論文を読んでいて、その自分のナラティブを持つところから、自分のアイデンティティ構築が始まるんだというところが、すごくいいと思っていて。その第一歩なんだというのは思うんですけど、21人の個々バラバラのアイデンティティを、一冊の本で理解しろと言われてもちょっと悩んでしまった。

森田：ありがとうございます。ナラティブから始まっている、っていうのはすごくよくわかります。そのナラティブに直面したときに、そこから出発点なのかなっていうのはすごく思うところなんです。逆にそこからしか出発しちゃいけないような気もしているんですけど。

質問者：森田さんが、外国人が見えないと学生たちが思うような、鹿児島にいらっしゃって、この本がすごく印象に残ったというか、この本を読書会に勧めてくださったんですけど、森田さんご自身の経験についてちょっと伺えたらなと思っています。

森田：日本にいて、ですね。最初にお話ししたことはそうですね。最近になって鹿児島にはベトナムの人がものすごくたくさん増えていて、たくさんいるんですね。でも外見上はあんまりわからないので、鹿児島には外国人がいないって思い込んでいる学生がほとんどで、外国人の話をしてもしピンとこない、そんな外国人なんていないじゃないですか、っていう。だから東京の大学生と全然違う経験を、鹿児島の大学生はしているんですけど。なので、イギリスのこういう人たちがしている経験というようなものとか、ステレオタイプであるとか、そういうものに全く触れずに話をしている学生が結構たくさんいて。そういう学生に限って、私差別したことがないですって、本当に真面目に言うんです。差別した経験もないし、された経験もないです、って。だから、差別とかわからないんです、って。ほんとにストレートにそういうことを言ったりして。さっき、偏見を持っている人は、“Privilege is invisible”という話をされたのですが、まさにそれで。自分たちがマジョリティ側にいる学生の人たちがそういう風に言ってるというのを聞いて、ちょっと怖いなと思ったりして。山岸先生がさっきおっしゃったようになかなかわかりづらいというか。イギリスのイーストエンドで繰り返されている日常の状況というのはすごいわかりづらいのかもしれないんですけど、でもそこから始まっているんだよな、って思うところです。だからこそ、まずここからというか、こういう個人個人の経験が書かれているところから知ることっていうのが大事なかなって思っているところです。

沼田さんは何かありますか？

沼田：今伺って、それこそまた本と離れていってしまうかもしれないんですが、差別したこともなければ、されたこともないという学生さんは、ジェンダーについてはどう考えられているんでしょうか？例えば、女性の学生さんだったら、鹿児島での生き方について何か疑問を持つとか、そういうこともないんですかね？

森田：多分、ジェンダーも同じようなことがあって。女子学生でさえも、女性は差別を受けたことがない、っていう状況もあります。やっぱり、それは個人の経験ですね。学生の中でそういう人たちがいて。どういう風に個人の経験を読んで、それを最終的には頭の中で考えることは個人の自由なので。それを社会の中でどうやって状況を変えていくのか、というのに繋げないといけないなという風に思っています。

ジェンダーの問題も同じなのですが、そういう風にして、自分が差別されていないと思っている人は、現状を変えようとしなくなっちゃう、というところがあって。それは社会の側が、なんとか別の方向に持って行かなきゃいけないものなのか。

先日読んだ新聞の中に、人間というのは屈辱を受けた状態では生き延びていけないと書いてあったんですね。でも社会の上層の人たちは、貧困に喘いでる人たちとか、屈辱を受けたままでも人間は生きていけると思っている人たちがいるみたいです、どうやら。そういう人たちは、資本主義社会の中で自分たちの富を増やすことだけを考え、屈辱を受けてもう生きていけなくなった人たちのことを考えない傾向がある。考えないんじゃないか。差別を受けてる人っていうのはそういうことで。差別を受けるといえるのは、具体的に体に暴力を受けているわけでもなんでもないんですけど、そういう状態というのは生き延びていけないわけですよ。自分とは別のものとして、そういう屈辱を受けながらずっと生きていけないということを、考えない人たちが社会にはいて。そういう人たち、屈辱を受けながらも生きていけないと思った人たちが、トランプにしがみつき、実はそういう行動に出してしまうんだという。それで、別の人に攻撃をしたりとかするんだということも、あるのではないのかなと思います。

沼田：虐げられたものの中での、やり合いというのもあると思います。あるいは、特権というものを、今まで気づかずに持っていた。今までは白人の中流家庭の男性というだけで楽々と生きてこられて、特権自体にも気付くことがなかったのに、今いろいろな声が聞こえるようになってきて、何かいうとすぐレイシストだと非難されてしまうような状況になって、初めて特権を失いそうになっていることに気付いて、それにしがみつくていう。多分いろいろなレベルでのしがみつき方とか、リアクションの取り方があって、その辺のところでトランプは上手に人気を得てきたんじゃないかなとは思いますが。

やっぱり特に気になるのは、私は日本にいて女性であるというのはそれだけで大変に難しい状態だと思うのですが、そうは気付きたくないから気付かないのか、本当に気付かないのか、実際に声を上げて、散々叩かれている人を見るから声を上げないのか。そのリアクションの取り方がかなり気になって。それで、大学にいらっしゃる女子学生の方たちはどう思っているのかなってさっき伺ったんですね。

さきほど質問者の方がご指摘くださったように、この本について話をしようとしても本当に難しいと思います。読むのが難しいという英語のハードルだけでなく、全体像を掴むことも難しい。それは、ステレオタイプを避け、簡単に分かったと判断されるようなものにしない、というシュクラの意図があつてのこと。理解しやすい、いかにもなストーリーを求めてくるイギリスのマジョリティ側の読者に対して、シュクラは様々な声を出すことで、そうはさせまいという意味を示している。そして、読者を戸惑わせるこの態度こそ、差別に対してどうリアクションをとるのかという問いへの、本書に通底する一つの回答ではないかとも思います。経験というのは、人種ももちろんそうだけれども、ジェンダーも、世代も居住地も家庭状況も社会情勢も経済状況も、ありとあらゆるものが関わってきて、そこに程度の差があったり、形が違ったりする。だから属性だけで判断するのも、属性を完全に無視するのも間違い。だけど殊、イギリス社会における POC については、人

種だけがものすごくインパクトを持ってしまっている。この難しい本の中で読み取れるのはそういうところで、私たちがいかに、白人男性異性愛者かつキリスト教徒シスジェンダーの英語母語話者が、普通で最も信頼できるというふうに描かれている世界に生きているかを、突き付けている。それはメディアの世界に過ぎず、現実の世界に照らし合わせればむしろ特殊なんだけれども、それを私たちは内面化している。こうした問題を炙り出すのは、この本のすばらしいところの一つなのかなというふうにも、今お話を伺いながら考えていました。

ですので、もう時間もだいぶ過ぎてしまったのですが、この本に限らず、私がいろいろな解釈で、差別の問題とか、逆差別はないとか、偏見と権力がということを言ってきて、恐らく聞いてくださっている方々それぞれに、それは違うんじゃないかっていう考え方もあると思います。ぜひご意見伺えると嬉しいのですが。

森田：いったん時間が来たので、ここで会を閉めて、残っていただける方は残っていただくということにして、いいですか。

ということなので、だいぶ時間も過ぎたので、いったんここで閉めます。その後もまたこの議論の中で、もうちょっと続けて何かご意見ある方からお話聞きたいと思います。

* * *

沼田：さきほど質問者の方が、アメリカ社会でのマイノリティの経験の違いについて指摘してくださいましたが、逆にアメリカ社会を研究されていて、ブラック・アメリカンが自分たちの経験は違うんだというふうに主張することに対して、他の、例えばアジア系とか、ヒスパニックといったマイノリティたちは、どう思っているのか？というのは今回のBLM運動でも、マイノリティ全員がBLMに賛同したわけじゃなくて、なぜ黒人の事ばかり、とか、私たちのマイノリティとしての経験はどうなるのだとか、リアクションが全然違って。私は賛同したいと思って、命の危機にいつも晒されるような状況というのはおかしいと感じたのですけれども、そう感じない別のマイノリティが沢山いる。トランプに投票したマイノリティもたくさんいる。その辺りについて、アメリカ社会を見てこられて、ムスリムがどんな風なことを考えているのかとか、何かご教示いただけると嬉しいのですが。

質問者：アメリカの多分こういう研究ってすごいあって、日本でもされてる方は多いと思うので、私がそのようなことを言うのはおこがましいかなっていうのはあります。勉強中っていうところなんですけど。

確かに私がアメリカでムスリムコミュニティを見る中で、一つ気づいたことは、まさにマイノリティが全く一枚岩ではないという構図があって。端的にムスリム社会の中だけで言ってもですね、単純化してしまうと、移民で、南アジアとか、アラブとかから来ている人たちは、やはり成功しているんですよね。それは白人のある種主流派社会に参加できて、それで成功していくという流れがあって。まさにアジア系というと、モデル・マイノリティという。そういうムスリムの人たちが、

長らく黒人のムスリムのことはほとんど関心もなかったし、そういうことも気がつかなかった。でも、最近ではムスリム社会の中でもそういうことが指摘されていて。それはやはり自分たちがイスラマフォビアでそういう扱いを受けるようになったということも、大きくあるんですけど。それは私も感じています。私が勉強した限りだと、アメリカでは白人にならないと成功できないっていう、そういう構図があるので。みんなが白人になろうとする、白人という、社会的構築物としての白人になっていくところで。同じマイノリティでも結局ほとんど関心がないというか。もちろんアジア系の人たちも、その人たちもその人たちが民族差別を受けながら、頑張ってきているという自負はあるので、そういう語りはあって。それに対して黒人の人たちは、やっぱそうではないのだという声ですよ。そういう中での分断というものですよね。ただそれが最近はある意味では、一生懸命なんとかしていこうという形で、協力していこうという、私の見立てのでは、そういうものを強く感じて。

これも個人的な経験で、シェアさせていただきますが。私が調査してた、まさにトランプが大統領になって、ムスリム禁止令が出た時だったんですけど。サンフランシスコに、日本の学振の連絡センターがあって、そこに日本からきている、ほとんど医学部とか理系の人出、そういう人たちが講演会しているんです。ちょうど Muslim Ban の時なんですけど、誰も一切何も言わなかったし、関心もなかったという感じですよ。自分たち、日本人は、まず全く関係ないだろうと思っているんだなってやっぱり実感したのですよね。

ところがムスリムの人たちも、実は高学歴で、アメリカの理系とかで、留学で優秀な研究者になってる人も大量にいます。その人たちが Muslim Ban で突然、夏休みに帰国してアメリカに戻ろうと思ったら、もう戻れないという経験をして。それが大パニックになっていたんですが。それを見ると、いつ自分たちだってそういう目に遭うかわからないのにな、となんとなく。そういう構造ですよ。

個人的にも感じる事があって。私自身はムスリムではないですけど、ムスリムコミュニティと付き合っ、アメリカと日本を行き来すると、ある時怪しいからだめって言われる可能性はあるかなと、毎回危機感を感じたりもしていたので。そういうことをちょっと学ばせていただいた。いずれにしても、そういう中でのマイノリティ同士での多様性という格差というか、そういうものはアメリカでは強く感じて。

先ほど、森田先生もおっしゃっていましたが、やはり歴史的な経験ですよ。歴史って私は結構大事だと思うんですよ。そこに至るまでの、どういう形でその国を構成するようになったのかということは。だから、今たまたまそこにいる人の経験だけではなくて、私自身が歴史をやっているものもありますけど、それはやはり理解しないとその部分まではわからないのはあるかなと個人的に感じました。

沼田：今、お話を伺って思い出したのが、ハサン・ミンハジというコメディアンです。彼はインド出身の両親の元に生まれたムスリムですが、彼が、フロイドさんが殺された後に YouTube で出したのが、「なぜ僕らアジア・アメリカンがここにいられるか」というと、ブラック・アメリカンの人びとが公民権運動で動いたことで、我々にもここにくる道が開けたからだ。だから我々はここに

きて頑張っているかもしれないけれども、ここにきた以上良いことだけを受けるんじゃないくて、この負の部分も一緒に解決しなきゃいけないんだ。だからBLMが関係ないなんてことは全然ないんだ」という、すごく力強い動画でした⁹。まさに、ここにくるまでに至った歴史的な経験を見る必要というのを、今伺っていて思い出しました。

森田：他に何かありましたら。

参加者：私はこの本読んでいないのでちょっとアレなんです。色々申し上げたいことはあるんですけど、固まってないですね。

ちょっとふと思ったのは、外国人の方、移民だとか難民を受け入れる際に、日本人はどういう風に理解したらいいのかなというのを、もっと我々がわかりやすい個人的な語り口、経験で語る必要があるかなというのを。私も子どもの頃から、私はずっと山梨の田舎町で生きてきましたけど、例えば同級生には北海道から来た転校生とかたくさんいたり、転校という経験たくさんありますよね。転校生という経験と、難民。もちろん肌の色とかはそんなに変わらないかもしれないけども。日本人にとっての移民難民問題にどう対応するかというのを、そういうところから解きほぐす語り口が必要かなと思って。外国人が異文化の人が入ってくる問題だと思ってるかもしれないけど、もうちょっと、我々が移民問題難民問題に接近するような語り口があってもいいんじゃないかなと思ったりしたんですけど。

こう学術的世界に住んでると、難しい議論から入ってこようとするけれど、あくまでも個人の経験からアプローチしようと。現在の人文社会科学の基本は、個人の立場からアプローチしようということ、それが大事だと思うんですね。硬直しちゃうとどうしても理論から、枠組みから入ろうということになっちゃうので。ということは思いましたね、一つの論点で。

後私は、欲望の塊で。どういう欲望かということ、イスラーム・ジェンダー学の成果にみなさんどんなふうに関与してもらったらいいかとかね。どうしたら原稿書いてもらえるかなとか、そんなことしか頭考えてない。今日残ったみなさんも含めて色々書いて欲しいな、と私の欲望の表現なんですけど。

最近私考えているのが、ヒューマニズムをどう考えるかということで。ヒューマニズムってやっぱり基本的に個人の経験を基にしてしか、ヒューマニズムは成り立たない。

でも、ヨーロッパ中心のヒューマニズムってそうじゃないんですね。いろいろな立場のヒューマニズムあるんだけど。例えばマルクス主義的なヒューマニズムというのもありうると思うけども、それはまあ階級という型を中心とした人類というのを考えているわけだし。白人のヒューマニズムというのはやはり、キリスト教徒の白人のヒューマニズムを中心に考えていて。

それは、相手をいかに非人間化するという。何人かの皆様昨日ご覧になったと思いますけど、ASNET でやったムクウェゲ医師の。多分ヒューマニズムを考え出すと、人間をいかに非人間化す

⁹ We Cannot Stay Silent About George Floyd | Patriot Act Digital Exclusive | Netflix
https://www.youtube.com/watch?v=i_FE78X-qdY

るか。ああいう問題と、この難民の問題ってかなり通底しているんですよね。それについてはもうこれ以上申し上げないけれど。

人間を考えるという経験に立つというのは、個々人の経験に立つ。難しい、私も本読んでないからわからないんですが。個々人の人間の体験を中心に考えるということが、ヒューマニズムの基本だということは、多分この本からも知れるんでしょうね。昨日の映画からも私もずいぶん教えられました。そういうところで、既成のヒューマニズムの概念を打ち破って、新しいヒューマニズムの形を。ユニバーサルな経験というのを議論・提起されてますが、何がユニバーサルかというのをみんな考えていきたいというのが、IG 科研の課題だと思うんですよね。

森田：ありがとうございました。ぜひ沼田さんにも書いていただければと私も思っているところなので。そろそろ九時半近くになってしまいましたので今回はこれでということ。

事務局：ありがとうございました。大変素晴らしいお話でした。私も実は本読んでなくて発言しにくかったんですけど、日本版があるとまたいいのかなと思いました。

森田：日本版できると思います。この前のムスリム二世の話で、できるんじゃないかなと思ったりします。

事務局：それこそまさにハーフって言われたり、少しずつ線引きをされるという方々、私もそういう経験、日本にしながら、マジョリティに居ながらという中で、そういう線引きをされる経験はあるんですけどたくさん。そういうものを、いちいち書いていくというのは大事なことになるのかなというのは、伺ってて思いました。今日は本当にお二人ともありがとうございました。